

祝・ご卒業

皆様、ご卒業おめでとうございます

皆様の大学生生活最後の2年間は、新型コロナウイルス・パンデミックのために、全く予想もしなかった2年間になりました。大学に出向くことができない日々が続く、などと予想した人がいるでしょうか。オンライン授業、学内外のほとんどの活動ができない大学生生活。この息苦しいような大学生生活に、皆さんはよく耐えてくださいました。

しかし、この困難な試練の中で、社会は大きく変化しました。ICT活用の新しい技術がどんどん進歩・普及し、2019年までの社会とは、良くも悪くも全く異なる社会になったように思えます。この新しい社会へ、恐れずに踏み出し、力強く歩んでください！

どうぞ、お元気で！

日本のキリシタン再発見の日（1865年3月17日）

1549年にフランシスコ・ザビエルによって日本に伝えられたキリスト教は、織田信長の保護のもと信徒も増えました。ところが1587年、それまでキリスト教を容認していた豊臣秀吉は「伴天連追放令」を発令し、教会に対する迫害は大きくなり、1597年には長崎西坂の丘で26人の司祭・信徒・修道者が十字架につけられて殉教しました。秀吉の後に天下をとった徳川家康は、当初は通商貿易のためにキリスト教布教を黙認しましたが、1612年に「禁教令」を出し、1614年には宣教師たちを国外追放しました。その後、長い宣教師不在の期間を経て、キリシタンたちはいなくなったと思われていました。

長崎の外海地方には、バスチャンという洗礼名の日本人伝道師がいたと言われています。彼は、迫害の中、宣教師ジワンの弟子として宣教に従事し、ジワン神父から「日繰り(キリシタンの暦)」について教えを受け、外海地方の宣教に尽くしました。とらえられて牢で厳しい拷問を受け、長崎で斬首により殉教したと伝えられています。彼がキリシタンたちのために残した「バスチャンの日繰り」のほか、彼の次の4つの予言は、キリシタンたちの中で大切に伝えられ、彼らを支え、助けとなっていました。

1. 七代までは我が子と見なすが、その後、救霊は難しくなるだろう。
2. コンソーロ(罪の告白を聴く司祭)が、大きな黒船に乗って来て、毎週でも告白ができるようになる。
3. キリシタンの歌を、どこででも大声で歌って歩けるようになる。
4. ゼンチョ(異教徒)に道で出会ったときは、先方が道を譲るようになる。(裏に)



「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。

人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」

(ヨハネ福音書15章5節)

卒業感謝ミサへどうぞ

卒業する皆さんに神様の祝福を！

日時 3月17日(木) 10時~11時  
場所 北16条校舎 聖マリア聖堂  
対面参加とオンライン参加が可能  
対面参加は制限があります(70名)  
事前登録をお願いします  
ポータルサイトでご確認ください  
多くのご参加をお待ちしています

聖書のことば

あなたは存在するものすべてを愛し、  
あなたがお造りになったもので  
あなたが忌み嫌うものは  
何一つない。  
憎んでおられるのなら  
造られなかったはずだからである。  
もしあなたがお望みにならなかったのなら  
どのようなものでも いかにして存続し得たであろうか。…  
いのちあるものを愛される主よ  
すべてはあなたのものであるゆえに  
あなたはすべてのものに  
思いやりをかけられる。

(知恵の書 11・24~26)

(表面からの続き)

信仰の自由が認められる時代が来ることを予言しているように思えます。キリシタンたちは、絵踏でイエスの十字架を踏み、家に帰ってから踏んだ足を洗って、その水を飲んで償いをしたと言われています。イエス・キリストを度々裏切ったという罪の意識に苦しみ、コンヘソー口に告白できる日を心から待ち望んでいました。

一方、日仏通商条約に基づきフランス人の礼拝のために長崎大浦に建設された大浦天主堂の献堂式が、1865年2月19日に執り行われました。その1カ月後の3月17日、浦上の潜伏キリシタンたちが大浦天主堂を訪れプチジャン神父に信仰を告白します。プチジャン神父が翌日ローマへ書き記した手紙から抜粋します。

~~~~~

昨日の2時半ごろ12名ないし15名ほどの男女が、教会の門前に立っていました。ただの好奇心で来た者たちとは、なにか様子が違います。わたしは急いで門を開け、祭壇のほうに進んでいくと彼らも後からついてきました。

わたしが跪いてほんの少し祈った後でした。40歳か50歳くらいの女性が、私に近づき、胸に手を当てて囁きました。「ワレラノムネ、アナタノムネトオナジ」「本当ですか？あなた方は、どこからこられたのですか？」「私たちは、浦上の者です。浦上の者は皆、私たちと同じ心を持っています。」

それからその人は、私にこう尋ねました。「**サンタ・マリアのご像はどこ？**」

「**サンタ・マリア**」この言葉を聞いて、私はもう少しも疑いませんでした。私の目の前にいる人たちは、日本のキリシタンの子孫に間違いのないのです。

~~~~~

このとき、キリシタンたちは、プチジャン神父に三つのことを尋ねました。それは、「聖母マリアを崇敬しているか」「ローマのお頭様(教皇)から遣わされたのか」「独身であるか」ということでした。神父の答えを聞き、自分たちキリシタンが待ち続けたパードレであることを確認しました。

厳しい迫害の中で司祭不在でありながら、七代にわたり二百余年の間、信徒たちはその信仰を守り、伝えてきたのでした。バスチャンの予言に支えられ、七代この苦しみを耐えたら、救いがやってくると希望し続けたのです。そして大浦にできた天主堂に思い切って出かけ、待ち望んでいたパードレなのかどうか、確認しようと思いました。

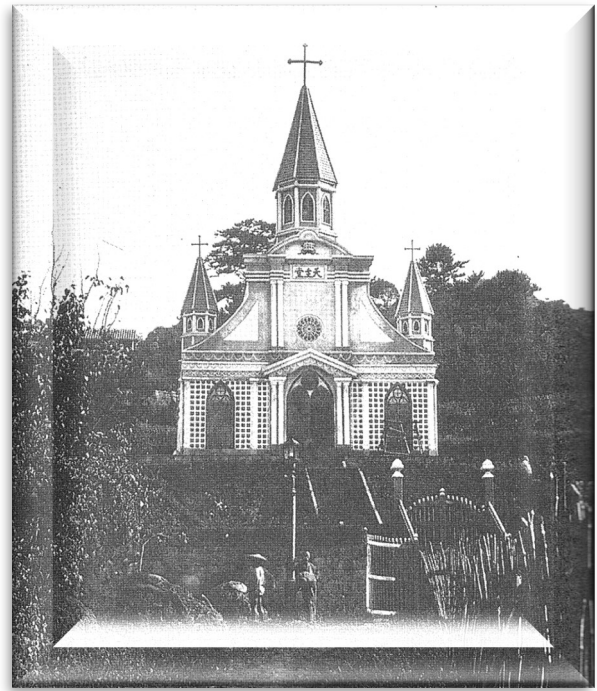
この時、勇気をもって仲間を説得して誘い、信徒発見という歴史的出来事を中心となったのが女性でした。プチジャン神父に最初に言葉をかけ、「ワレラノムネ、アナタノムネトオナジ」と告白したのは、杉本ゆりという当時52歳の助産師

(写真、右)で、イサベリナという洗礼名の人でした。この世界を驚かせた歴史的な出来事の中で、一人の女性が果たした勇気ある行為は忘れられません。そしてキリシタン発見のきっかけとなったマリア像は、今も大浦天主堂の中にあります。(写真、前頁)



ロシアによる一方的なウクライナ侵攻によって、ウクライナ人の平和な日常生活が破壊され、戦火を逃れて国外に避難せざるを得ない状況になっています。全世界の人々と心を合わせて、一日も早い和平のために真剣に祈りましょう。

\*\*\*\*\*



キリシタン発見当時の大浦天主堂

この出来事に続いて、キリシタンたちは浦上に4つの秘密教会を作ります。自分たちの葬式を、これまでのように檀那寺ではなく、その秘密教会で自葬するようになりました。檀那寺との絶縁を望む者たちの名簿を庄屋に提出し、キリシタンであることを告白したのです。これは、浦上四番崩れと呼ばれる大迫害を招くこととなります。1867年に秘密教会はすべて破壊され、江戸幕府、明治政府による迫害が始まりました。1868年に浦上全体の3394人が萩、津和野、福山など各地に流刑になりました。しかし、諸外国からの激しい抗議を受けて、明治政府はついに1873年にキリスト教禁止の政策に終止符を打ち、流罪を解きます。644人が殉教し、1883人が浦上に戻り、1880年に浦上に仮聖堂を設け浦上天主堂になります。

